

【木内委員御意見】

2008.4.14

第二次情報セキュリティ基本計画に関する意見③（木内）

■ メッセージにおける無謬のレベルについて

- ・ 情報セキュリティがリスクマネジメントの対象であることを考えれば、無謬のレベルを追求することが合理的でないことはすぐに理解できることではあるが、受容せざるを得ないリスクがあることを知らしめる場合の表現には十分な工夫が必要である。
- ・ 会議の際に、情報セキュリティのインシデントについて労働災害における経験則として知られるハインリッヒの法則を例に出したが、労働災害に関しては人命に係わるゆえに受容せざるを得ないリスクの存在を認識しながらも「無謬性の追求」をしなければならないのである。
- ・ 情報セキュリティのリスクも組み込みソフトウェアや制御系ソフトウェアを考えれば、無謬性の追求をしなければならない人命に影響するケースも考えられ、完全性や可用性の無謬のレベル追求が必要な場合もある。
- ・ 一般の消費者向け情報システムや業務用の情報システムの多くは、コストに膨大な負荷をかけて対策を講じなければならないほどの情報セキュリティ対策が必要なわけではない。重要インフラになると、社会的な影響が大きいことから相応の対策は必要である。第2次計画では、この辺りの対象に対する無謬性の追求に関わる必要性の違いをよく理解してもらう必要がある。
- ・ また情報セキュリティ向上のためにはコストがかかり、それが推進の阻害要因のような受け止め方があるが、これは実態を反映していない。参考までに、日本ネットワークセキュリティ協会の個人情報漏洩インシデント調査を例にとれば、情報セキュリティのインシデント発生原因はほとんどが管理体制と知識や情報不足にあり、対策技術の不足の問題ではなく非技術対策が重要であることがわかる。

■ 理念・哲学について

- ・ 現実の姿と理念・哲学として掲げるものとは常に隔たりがあるのは事実であるが、理念・哲学は「拠り所」であり、「高邁な志」を示すものであるべき。
- ・ しかし、どのレベルでそれを謳うかは議論を重ねても無駄ではない。前回の意見では【せめて「アジアでの情報セキュリティのリーダーになる」というようなレベル目標】と書かせていただいたが、「国際社会のリーダー」といって恥ずべきところがなければなお良いと思う。
- ・ 少なくとも日本はフィジカルな面でのセキュリティレベルは今でも高く、旅行者にとっても最も安全な国と言える。これと同レベルを目指すのであれば、「国際社会のリーダー」と言っても言い過ぎではないだろう。

以上